

《編集後記》

『日蓮学』第三号をお届けいたします。本号は左記の五先生より『日蓮学』にふさわしい多岐にわたる玉稿を賜りました。

渡邊寶陽先生の「優陀那日輝『一念三千論』本迹段について」は、近代日蓮教学の泰斗である優陀那院日輝が四十歳の時に著した『一念三千論』の本迹段の内容について論じられており、日輝の持つ天性の鋭敏な思考力が『摩訶止観』にならない、一念三千を論ずるにあたって論理的な体系を勘案したのではと述べられています。

次に堀部正田先生の「近世における御書関係書籍の出版事情概観」は、近世江戸時代に幾度となく形をかえ、出版された日蓮聖人遺文集やその周辺の出版事情について論じられています。特に近世初頭の録内・録外御書の出版から遺文の注釈書の出版などについて概観されており、堀部先生の研究視座の広さをうかがえる論考となっています。

岡田真水先生の「薬王菩薩本事譚と日蓮の焼身供養観」では、現実に起こった焼身について論述されながら、薬王菩薩本事品に説示される一切衆生喜見菩薩の物語について検討を加え、さらに日蓮聖人遺文にある説話に関する言及を収集しながら、これを分析されています。そして聖人の求法の行いのあり方を確立する重要性が述べられています。

横殿伴子先生の「『マニ・カンブン』における「ヴェツサンタラジャータカ」——観自在菩薩の化身としてのチベット王ソントンエンガンポとダライ・ラマ五世（試訳付き）——」は、チベット土着の仏典であり、埋蔵経典の一つである『マニ・カンブン』についての論考であります。『マニ・カンブン』は埋蔵経典でありながら独自の人気があり、ダライ・ラマ五世が観自在菩薩の化身であることを教証として示すために意図して彼自身が創作したものだという説さえ出したほどであるといえます。本論は『マニ・カンブン』について概説し、その中の一部の試訳がされています。

最後にジツリオ、エマヌエーレ・ダヴィデ先生の「身延文庫蔵・日宣筆「諸法実相伝鈔」の告白——最蓮房宛て「諸法実相鈔」

の来歴をめぐって——」は、身延文庫蔵・日宣筆『諸法實相傳鈔』という口伝書を書誌学的に考察し『諸法実相鈔』を引用しながら、その来歴について重要な情報も伝える中世の資料として本書の紹介がなされています。

末筆ですが、今後もこの『日蓮学』が一宗の教学という狭い枠にとらわれること無く、世界的に認知されることを切に願ひ、第三号の編集後記と致します。

(木村中一記)